

# 「和泉式部日記」研究

——作者・和泉と「女」の距離を探る——

篠 原 香 織

はじめに

「和泉式部日記」によって描出された世界は、期間にして約十カ月、長保五年四月に和泉式部と冷泉院の第四皇子・敦道親王が出会い、十二月十八日に和泉の南院入りによって宮の北の方が邸を出ていくまでが描かれている。本稿では、この作品では既に繰り返し論じられてきた「物語性」の問題について、描出された内容を分析することによっていま一度考察してみたい。

そもそも日記文学の物語性の根本は、書き手の、自分自身の経験との対決の仕方によるものとえられ、<sup>注1</sup>「対読者意識」的な技巧という点も見逃す事はできない。そこで、この日記の作者である和泉式部は、自身の恋愛体験とどのように対決しているか、に焦点をあててみたい。この作品の叙述上の特色の一つに「女」という自身の第三人称化がある。これ一つをとっても自分の体験

に、一定の距離を保とうとしている意志をみる事が出来る。主人公の第三人称化は、他の女流日記文学作品には見られない極めて特殊な叙述であり、「蜻蛉日記」でも道綱母は自分を外から対象的に指すことはなく、素直に「われ」を用いている。しかし、「和泉式部日記」では、地の文で作者の和泉式部が明らかに自身に一人称を用いた例は一つも無いのである。このことから、作者・和泉の「自分自身の対象化」の姿勢は少なくとも叙述の面では徹底していると思わなければならない。他の物語的叙述として

○和泉式部の知るよしもない出来事（女の経験外の出来事）が単なる想像としてではなく、あたかも見ているような筆致で書かれている。

○地の文の中に女（すなわち作者自身）の心中思惟のみならず他の人物の感情語や心語が描出されている。

という二点が挙げられるが、これらも経験した事実との距離のあ

らわれ、と考える事が出来る。

これらのことは次のように考えられないであろうか。作者と女が別人であつたら、女を主人公とした単なる物語としてこれらの叙述も当然になるのだが、同一の場合（自作説をとる場合）、「事実を描く」という意識の中で、何らかの必然性によってこれらの叙述はなされたとしか考えられないということである。和泉は、女、つまり宮と恋愛している自分自身を分身的に思い入れ深く扱ってはいるが、底においては突き放し、恋愛そのものに対しては始めから客観的な姿勢をとっていたのではないだろうか。それを明らかにするため、作者と女を一旦切り離して、物語的叙述の内容と、作品全体に占める位置を考察し作者・和泉式部の宮観・恋愛観が女のそれとどう異なるかを探ってみることにする。また同時に、何故あえて自分の知らない世界を挿入したのか、物語的描写への必然性についても考えてみたい。

—

(一)

超越的視<sup>注2</sup>点とも呼ばれる、本来和泉式部には見えるはずのない出来事が描かれた部分は、全部で二十三箇所<sup>注3</sup>にのぼる。転換した場面は、女の家での小舎人童と樋洗童の会話を抜かせば全て宮の

邸で、登場人物は宮の他に「人々」（登場回数2）、童（5）、右近の尉（1）、乳母（1）、北の方（3）、北の方の姉君（1）、女房たち（1）などである。女が宮に代詠を頼まれるまでの「恋愛初期」（以下、第一段と記す）での十四例のうち、宮が女の家へ行くことを思い止まったり、女へ文を出さない事を表しているものが六例ある。これは数よりも、そのような事情を和泉自身が記したという事実注目したい。その他の内訳は女のもとに出かけたり、文をつかわす場面が十例、女が出した文に対する反応が五例ある。女の南院入り後（以下、第三段と記す）の四例は全て女に關しての北の方の嘆きと里歸りに至る事情についてである。ここでは今までこのような叙述の中では主たる人物だった宮が、ほんの脇役程度しか登場していない事に気づく。北の方の里歸りに關する事情も宮の側から描こうと思えば描けないことはないはずであるのに、何故ここで北の方が大きく場面を占めることになったのか。和泉にしてみれば、書き手としても女としても北の方よりは宮の方が近い人物のはずである。最後に及んでのこの語り口も何か作者の大きな意図が隠されているような気がする。ともあれ、全場面が女と宮との恋愛とその交渉に關わるものであり、想像で書かれたとはいえ、まるで関与していない事柄や場面に自在にとぶのではなく、自分自身が大きく關係している極めて狭い範

冊に限られている。第一段、第二段（冬の夜の歌の贈答まで）における物語的叙述は、女と会っていない時の宮、或いは外で女と会って邸に帰り着いた後の宮の姿を描こうとしたものであったことはほぼ間違いない。つまり、作者の宮観、宮に対する思い入れがストレートに現われている箇所として受け取る事が出来る。

作者・和泉式部の知っている宮は、女の知っている宮である。故に、この作品中の女と会っていない時の宮は和泉の想像による姿なのだが、そこには女と会っている時の「情熱的貴公子」像とは別の、俗性が表われているのである。女との出会い以前に、女から贈られた歌を童から受け取る場面では、「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」<sup>(p13注4)</sup>と口止めしている。女からの充分に誘いを含んだ歌に対して、喜んで返歌を詠んだ直後、ぬかりなく童に口止めたのである。一方、女は童に歌を託す時にこう考えている。「なにかは、あだあだしくもまだきこえ給はぬを、はかなきことをも」<sup>(p12)</sup>。「宮が浮気な方だということは聞いたことはない」と思った、というこの部分と、口止めする宮の姿は、皮肉をこめて対比的に描かれたと考えられないだろうか。

宮の思いがけない来訪により、女と宮ははじめての契りを結ぶわけだが、そこでの宮の様子は「世の人の言えばにやあらん、なべての御様にはあらず、なまめかし」<sup>(p15)</sup>とある。ここは地の

文だから、一応作者の評ととるべきなのだが、その前の「あらながら帰したてまつらんも なさけなかるべし、ものばかりきこえんと思ひて、西の妻戸に円座さし入でて、入れたてまつるに」という文の主体者が女なので、この部分も「と思ふ」の省略された形で女の気持ちを表現したものとしてもよいように思われる。どちらにせよ、その時の宮の姿は「通り一ぺんの御姿でなく、気高く美しい」ものであった。だから「これも、心づかひせられてものなごきこゆる」とあるように女もごちなく話すのだった。

「かるがろしき御ありきすべき身にてもあらず。なさけなきやうにはおぼすとも、まことにものおそろしきまでこそおぼゆれ」とてやをらすべり入り給ひぬ。いとわりなきことどもをのたまひ契りて、明けぬれば、帰り給ひぬ。<sup>(p16)</sup>

女には筋が通らない程の大胆さで思いをとげた宮の様子が描かれている。問題にしたいのは、契りの後の二人のそれぞれの姿である。女は、後朝の手紙を交した後、「あやしかりける身のありさまかな、故宮の、さばかりのたまはせしものを」<sup>(p17)</sup>と故宮を追慕し、我身の罪深さを悲しみ乱れるものの、師宮からの手紙が来ないので思わず気がめいる。亡き宮への思いはまだ消えないが明らかに新しい恋へと心ひかれていく女の素直な心中が描かれている。一方、宮の姿は次のように書かれている。

(女からの文を) 御賢じて、げに、いとほしうも、とおぼせどかかる御ありきさらにせさせ給はず。北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出でんも、あやしとおぼしめすべし、故宮の、はてまでそしられさせ給ひしも、これによりてぞかし、とおぼしつむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。(p18)

宮は、女をいとしいとは思ふもののお忍びの外出はもうしなかつた。それは、北の方の疑いを恐れ、亡き兄宮が死んだその日まで非難を受けた世間を恐れたためである、逢瀬の時のあの無理矢理な大胆さが嘘のような、慎重というよりも既に世間体という現実感覚をとり戻した宮の姿がそこにはある。初めての契りの後の女と宮の対照的な変化と共に、女と宮の受け止め方と、作者の宮の描き方、つまり女と作者のそれぞれの宮観は少し異なることがわかるのである。その後の物語的叙述の部分は、宮が女のもとを訪れようとしながら、躊躇してやめてしまう姿が続けて描かれている。初めは、再度の歌の贈答の後の

おはしまさんとおぼしめせど、うひうひしうのみおぼされて日ごろになりぬ。(p18)

そしてもう一つは寝入っていて宮の訪れに気付かなかったという出来事の後である。

こよひもおはしまさまほしけれど、かかる御ありきの人々も制しきこゆるうちに、うち、大殿、春宮などのきこしめさんこともかるがろしう、おぼしつむほどにいとほるかなり。

通常「うひうひしう」は子供っぽく気おくれがされて、と解される。しかしここは尾崎知光氏<sup>注5</sup>が説いたように「おっくうだ」という意味を妥当としたい。何故なら、前に引用した物語的叙述の最後の「ねんごろにはおぼされぬなめりかし」という作者の宮観と軌を一にするからである。訪れよう、とは思うがおっくうで、そのうち何日もたってしまった、というこの中にも女に見せる情熱的な行動力とは裏腹な優柔不断さが表われている。次の部分でもそれ以前に二度も女を訪れて

すぐすをも忘れやするとほどふれば

いと恋しさにけふは負けなん

という歌を贈っているのに、大殿や春宮に噂が届く事態を恐れて思い直してしまう宮である。またしても噂や世間体にとらわれた姿が露呈している。しかも各々が前の部分での女への情熱的な行動力と対比されているようにさえ思えるのである。

(二)

そして、五月雨のつれづれの歌の贈答、五月五日の歌の贈答を経て有名な乳母の諫めの場面を迎える。そこに至るまでの女と宮の心理を追うと、まず女は宮が自重しているため訪れが絶えて、つれづれの日々が続く。「雲間なきながめに、世の中をいかになりぬらん」「すぎごとする人々はあまたあれど、ただ今はともかくも思はぬ」(p<sup>22</sup>)などと考えて過ぐす。帥宮との仲の不安が彼女の心を占め、他の男達の事なども考える余裕がない、という心境は既にもう宮との恋愛に没頭している。そして女もまた「世の人はさまざまに言ふれど、身のあればこそ、と思ひてすぐす」(p<sup>22</sup>)とあるように、世間の噂に困惑しているが、宮のうちに、世間体ゆえの困惑や用心はみられない。ここにも女と宮の恋愛への対し方の違いがある。女の宮に対する思いは雨の折の贈答に、「をりふしすぎし給はぬを、をかし」(p<sup>23</sup>)と好ましさが増している。また宮の方は、女からの返事が、いつもより沈んだ様子であったのを、「あはれ」に思う(p<sup>24</sup>)。更に女からの

よもすがらなにごとをかは思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつという返事を見、「なほ言ふかひなくはあらずかし」と次第に高まる思いが表われている。そして乳母の諫めを迎える。この部分は物語的叙述の中でもかなり長い例の一つである。乳母の言葉は和泉については、「たいした身分ではないのだから召人として使

うのが適當」「男達が多く通っている所である」とし、二人の仲を既に人々が噂していることも明らかにする。また「かかる御ともにかむ人は、大殿にも申さん。世の人は、けふあすとも知らず変りぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御賢じはつるまでは、かかる御ありきなくてこそおはしまさめ」と帥宮にその世間的な立場を説く。まさに二人の恋の障害となるものが乳母の口から語られる形で読者の前に明らかにされている。つまり、この場でもまた世間や世間体という觀念が大きく場を占めている。女への思いが高まっているはずの宮も、「何処か行かん、つれづれなれば、はかなきすぎごとするにこそあれ、ことごとしう人は言ふべきにもあらず」と一応は抗する姿勢を見せるが、心中では「あやしうすぎなきものにこそあれ、さるはいとくち惜しうなどはあらぬものにこそあれ、よびてやおきたらまし」「さても、まして聞きにくくぞあらん」と思い悩み、結局、「おぼつかなうなりぬ。」と、女から足が遠のいてしまうのである。乳母が見せた式部への蔑視は、歌の贈答では女を「なほ言ふかひなくはあらず」と思っていた宮の気持ちに「くち惜しうなどはあらぬ」と随分と弱めてしまっている。世間体という俗事にとらわれて女と恋に背を向ける宮の姿である。

さて、ここでの乳母の登場とその諫言、宮の対応はどのような

意味を持っているか。乳母は、作品中では恋愛の邪魔をするという意味で女の敵対者として、作者・和泉式部は自分自身の悪評を存分に語らせている。中でも男出入りについては、宮自身も疑いを持っているのだが、和泉は一応「すぎごとする人々はあまたあれど…」の部分で身の潔白を証明している。故に乳母の非難は一応女には濡れ衣ということになる。女の心は既に宮に傾いていて宮も女の歌の巧さに感心している。二人の心が通じ合い、更に恋が発展するかどうかの時に、またもや宮の優柔不断さと女を信じられない気持ちの水をさしている。しかもここはかなり長い文章で、読者に宮の印象を決定づけようとしたようにみえる。和泉が自分自身への非難を書いてまでも、このような宮の姿を描いたことで、この作品中、宮にどんな思い入れをしているのか想像できるのではないか。しかも、このすぐ後には、宮の誘い出し、日明の夜の贈答があり、また打って変わった大胆で向こうみずな宮が女をはらはらせているのである。女は邸内で乳母と宮にどんな会話があり、宮がどんな対応をしたか知らない。女をやったのと訪れた宮は「大方もつましきうちに、いとどほど経ぬる」と「まめやかに」弁解するが、すぐに女を無理やり車に乗せて「人もなき廊」に連れていく。(p27) 女はそのような逢瀬に拒否反応を示しながらも「あけぼのの御すがたの、なべてならず見え

つる」と宮の御姿に思いをつのらせている。女の恋愛感情は途絶えてはいない。

女は、宮に男出入りの疑いをかけられていることに苦しみながらも宮を憎むことはなく、かえって「なほいとをしきもおはしけるかな、いかでいとあやしきものにきこしめしなほされにしがな」宮はやはりすばらしいお方、何とかしてお考え直しになっていたきたいと思っている、という叙述がある。その直後に場面転換して描かれている宮の行動もまた今までのものと同じ傾向として注目したい。女を「言ふかひならず、つれづれのなぐさめに」(p34)と思うが、女房達が口々に女の男出入りについての噂話をするや、女を「いとあははしうおぼされて」久しく文を送らなくなった。女がこれほど望んでいるのにもかかわらず、宮は噂を乗り越えられないどころか尚更に浮薄なものと思い込んでいく。盛り上りかけたところでまたもや水がさされている。女と宮の心中表現が対象的に書かれているのも、作者の意図とみたい。

### (三)

初期段階で足踏みをみせるものの、その後も七夕の歌の贈答や秋の夕暮についての歌の贈答と、歌による交渉の様子が続く。女は宮が機会を逃さないのをさすかと思いますが、宮は女の歌を見て女

を思いきれなく思う、というように、二人の交渉は途切れることなく続いていく。そしてやがて女の南院入りを迎えるわけだが、第一段にて、このように続けて宮側の女から足が遠のいた事情―宮の踏みきることのできない性格が描かれたのはどのような理由によるものか。

その答えを、女の南院入り前の二つの事件に求めたい。

宮より御文あり。見れば「さりとて、と頼みけるが、をこな  
る」など、多くのことどものたまはせて、「いさ知らず」と  
ばかりある (p66)

女の男出入りに関する宮の疑いは、「人の便なげにのみ言ふを、  
あやしきわざかな、ここにかくてあるよ」 (p49) 「頼もしき人も  
なきなめりかし」 (p50) とここに至るまでに既に解消されたはず  
であったのに、またしても生じたのであった。これに対して女は  
「胸うちつぶれて、あさましようおぼゆ」と茫然自失となり、あれ  
これと思い悩む。そしてもう一つは、宮の突然の出家志向である。  
「かしこにゐてたてまつりてのち、まろがほかにも行き、法師に  
もなりなどして、見えにてまつらずは、本意なくやおぼされん」  
(p75) という言葉に女は「いかにおぼしなりぬるにかあらん、ま  
たさやうのことも出で来るべきにや」 (p74) とまず驚き、そして  
自らも尼になるほかない、と考えるほどに追いつめられる。

どちらも女にとっては前ぶれの無い、突然の出来事であった。

そのどちらの事件も起きる直前まで、女と宮は車宿での一夜、及  
び初雪の歌の贈答、詩作をめぐっての歌の贈答、霜白き朝の歌の  
贈答等、恋を謳歌していたのであった。南院入りに対しての女の  
心の動きは、始めはよろしからぬ噂がたつであろうことを予想し  
ながらも、「なにかは、さてもこころみんかし」 (p52) 「このぬ  
れ衣はさりとて着やみなん」 (p53) とあっさり南院入りを決意  
する。その後は「人笑へにやあらん」と迷う心が見えないわけ  
ではないが、宮の女車にて来訪の折は「ひるなどはまだ御覽ぜねば  
恥かしけれど、さまあしう恥ぢかくるべきにもあらず、また、の  
たまふさまにもあらば、恥ぢきこえさせてやはあらんずる、とて  
るざり出でぬ」 (p58) と南院入りを強く意識している。「御直衣  
に、えならぬ御衣出だし桂にし給へる、あらまほしう見ゆ。目さ  
えあだあだしきにや、とまでおぼゆ。」 (p59) と宮の容姿にも相変  
らず魅かれる様子がみられる。そして召人としての出仕は本意  
ながらも、「かばかりねんごろにかたじけなき御心ざしを見ず知  
らず、心こはきさまにもてなすべき、ことごとしはさしもあらず、  
など思へば、参りなん、と思ひ出つ」 (p65) とはっきりと決意し  
たのだった。女は宮に対しても南院入りに対しても前向きな姿勢  
を持っていた。

この二つの事件は、女を南院に誘った宮が、それを実行に移す前に見せた、迷いである。女には、男出入りを疑われたことはあったがこのような宮の優柔不断さを目のあたりに見るのは初めてのことだった。特に宮の出家に関しては、宮を頼りにしていた女には相当な打撃であったことが前述の文にも「女はそののちものみあはれにおぼえ、嘆きのみせらる。」(p76)というその後の様子にも表われている。そしてそうすると第一段で宮の邸に場面を移して描かれた宮の意志の弱さが、ここにおいて女の前に露呈したということになる。言い換えれば、はじめの頃に女の家に行くのを躊躇する経緯が繰り返し描かれた時の作者、和泉式部の頭の中には既にこの場面があったのではないか。つまり先程見た四例の物語的描写は、この南院入り前の事件、それに続く女の苦悩への伏線としての役割をも果たしていた、と考えられるのである。

このように作者・和泉式部の宮観は、決して宮に恋をしている者のそれではない。あくまでも冷静に宮の真の姿を描こうとしている。女の宮観、宮への思い入れが必死のものであるのと、対照的ときえ言える。女は恋愛に没頭している。それを冷静な和泉が描いたために、女には見えない宮の裏側の部分までも明らかにされて、あたかも女自身も宮の思い入れが浅いような印象を受けてしまうことが多い。

もう一つ注目しておきたいのが、第三段での北の方の描き方である。南院入り後の女(和泉)と宮は、二人の間だけに關しては非常にいい状態と言ってよい。宮の、女に対するやや度外れた寵愛ぶりが描かれている。しかしこれと反対に浮かび上がっているのが、宮の正妻である北の方の苦悩なのである。女の南院入り後は何故か北の方に比重がおかれた描かれ方をしていることは前にも少し述べた。物語的叙述は四例みられるが、そのいずれも北の方の嘆きが中心となっていて、御姉からの文とその返事、それに続く場面など、かなり長いものも含まれている。一方、南院入りした後の女の物思いは、北の方が退出する騒ぎを見て、「聞きにくきところしばしまかり出でなばや、と思へど、それもうたてあるべければ、ただにさぶらふもなほもの思ひ絶ゆまじき身かな、と思ふ」(p85)とあるのがただ一つである。北の方の心中については、「かからぬことだにあやしかりつるを、なにの高き人にもあらず、かくとのたまはせで、わざとおぼせばこそ、しのびてゐておはしたらめ、とおぼすに心づきなくて、例よりものもむつかしげにおぼしておはすれば」(p81)と憤りと不機嫌さを表わしてはいるが、「泣く泣く」(p81)「いと心憂くて」(p84)「おぼし嘆くこと限りなし」(p82)「御心いとつらうおぼえ給ふ」(p85)など、嘆きと絶望感がより強調されている。そして、ここにおいて



もまた宮の描かれ方を見ると、北の方への弁解として「人つかはんからに御おぼえのなかるべきことかは。御気色あしきにしたがひて、中将などがにくげに思ひたるむつかしさに、頭などもけづらせんとて、よびたるなり。こなたなどにも召し使はせ給へかし」(p82)と言っていて、先の乳母の言葉にあったように、女を召人として邸に招いたことで釈明しているのだが、そんな言い訳が通用しない程の待遇であったことは既に書かれているのであり、北の方を納得させられる筈のないことは北の方にも読み手にも明らかである。こうした宮の誠意のなさ、初期の頃の姿とも重なっている。言わばそれまでは女に対する宮の冷たさが描かれていたのだが、女の南院入りから今度は北の方の嘆きが強調され、読み手が同情するほどの、宮の北の方への冷たさが描かれているのである。つまり、作者の宮観は作品の最初から最後まで一貫したものといえる。

以上作中の「女」としての和泉式部と作者としての和泉式部の違いを宮観から探ってみた。特に作者の宮の描き方は、折節を逃さず歌を詠み「あはれなることの限り」を語るという理想的貴公子という表面的な姿だけでなく、世間の噂を恐れ、女の男出入りの疑いが捨てられず自邸では別人のようにふるまってしまうという、いわば隠された部分にも触れる非常に冷静で醒めたものであ

り、それは作品全体を貫いている。恋愛相手であった宮に対するその視線は、宮との恋愛経験そのものをどうとらえていたかに関係するほか、作品を貫いている意図があるということは始めから作品としての構想があった、ともいえる。次に、作者、和泉式部の執筆の姿勢をまとめ、この作品の構造について考察してみたい。

## 二

「和泉式部日記」の中に、作者・和泉式部の視点からの発言がわずかだが見られる。作中人物の評、宮と女について書き記した出来事への感想等であるが、そこに使用されている感情語は否定的な意味合いをもつものが多い。作者が宮に対して直接的に感情を表した箇所が一カ所ある。第二段・女と宮が車宿での一夜を過ごした時のこと

人静まりてぞおはしまして、御車にたてまつりて、よろづのことをのたまはせ契る。心えぬ宿直のをのこどもぞめぐりありく。例の右近の尉、この童とぞ近くさぶらふ。あはれにものおぼさるるままに、おろかにすぎにし方さへくやしうおぼさるるも、あながちなり。(p64 傍線筆者)

ここで宮は、女を訪れようと思っても決心がつかなくてやめてしまふことの多かった始めの頃の日々のことを後悔しているのだが

それを和泉式部は「あながちなり」と言っている。「あながちなり」——なんと身勝手なことよ、というこの言葉は、作者・和泉式部の宮への基本的な感情としてとらえていいのではないか。

また、契りを契機に女が宮との恋愛に傾いていくことは先に述べたが、その部分には次のような作者の批評がのぞいている。

御文やあらん、と思ふほどに、さもあらぬを、心憂し、と思

ふほどもすきずきしや。(p17 傍線筆者)

故宮の追慕に集中せず他の人との恋愛に心ひかれていく自分自身を深い嘆きをこめて突き放している。自分自身に批判的な叙述はまだある。

もとも心深からぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼ

ゆるに、はかなきことも目にとどまりて (p13~p14)

宮から二度目の文が来た時のことで、心がひかれてしまう自分自身を「心深からぬ人」、宮の文を「はかなきこと」と言い、それを恋愛の直接の原因としてすることに注意したい。和泉の反省と自嘲とさえ感じることができる。宮が世間体を気にする事に対しての「ねんごろにはおぼされぬなめりかし」(p18)という言葉も、宮へというより恋愛そのものへの醒めた目といえる。他にも恋愛への感想として

あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしごと

世の中をなぐさめてあるも、うち思えばあさましう (p38)

など言ふほどに、例のつれづれなぐさめてすぐすぞいとはか

なきや (p79) (傍線筆者)

という二例がある。いずれも自分自身である「女」への批判がこめられている。

「すきずきし」「あさまし」「はかなきや」という作者として用いた三つの感情は女と宮へ、そして二人の恋愛そのものへ鋭く斬りこんでいる。それは作者・和泉式部が、時には尋常ではない大胆さではらはらせるが、実はあまり頼りにすべきでない宮、そんな宮との文のやりとりで、容姿や情趣を解する心に魅かれ、全てを託して南院入りを決心するという恋愛の姿に批判的であることを直接的に示している。つまり、この作品を貫いている作者の恋愛観は非常に醒めたものであり、しかも批判的な色をも帯びていたわけである。この作品を貫く視点、全体の基調として、「つれづれ」「はかなし」で表されるような、女の孤独感や、寂寥感ということがよく言われ、そこから和泉式部像を探る試みも行なわれた。しかし、私は今あげた執筆の姿勢、つまり恋愛への醒めた目こそ全体を貫く基調としたい。

宮との恋愛に没頭している自分自身を冷静に見つめ、宮とその内面だけでなく、恋愛そのものをも客観化しようとしている和泉

式部が書いたのが「和泉式部日記」なのである。そして、その客観化志向の原因となっているのは、和泉の、帥宮との恋愛体験、少なくとも「日記」に描かれている初期の頃や南院入り前の事件への批判的な感情であろう。いわばこの作品は、「二重構造」を持っている。醒めている人が、熱している人を描き、その二人が実は同一人物である、という事情が、作品そのものを複雑にして視点の不統一などの問題が起こったのだと思うのである。既に述べてしまった事だが、この日記は恋愛の発展と共に同時進行で書かれたのではなく、南院入りを果たしてのちに、過去を振り返りながら徐々に書かれたのだと思う。つまり、「女」としての和泉式部の時間と作者の和泉式部の時間は違うのである。故に、同じ和泉式部であっても宮に対して違う感情を持ち、異なる視線を向けてもおかしくはない。時間をおいたために感情や価値感が変化した人が、昔の自分を思い出してその頃的情熱や嘆きを冷静に醒めた目で描く、という事は可能はずである。そして作品としての構想を持つこともまた可能であった。

始めの頃の宮の行動に波があり、女への思いも一定しない様子は宮の性格を印象づけるためのもので、これは南院入り前の本来の宮の姿が女に露呈する場面への伏線であり、作品としての構想の一つとしてとらえたい。

### 三

一度は没頭した恋愛を、批判をこめて回想するに至ったのは何故だろうか。和泉の内面の変化の原因について、数々の和泉式部研究の中から探してみたい。

#### (一) 出生にまつわる原体験

野村精一氏の伝記研究の中で紹介された説に、和泉の出生にまつわる原体験がある。<sup>注6</sup>「和泉式部正集」の中の連作歌の一つに、

いにしへや物思ふ人をもどきけん

むくいばかりの心ちこそすれ

というのがあがあるが、「いにしへ」の「物思ふ人」を詞書に出てくる和泉の「おや」、母・介内侍としているのである。母の異性関係がもしも本当のものであるなら、和泉式部はその出生に秘密の影を持ち、歌にあるように、母の所行を非難したことがその少女時代に実際にあったかもしれない。だとすれば、恋愛や異性関係に対してはじめに持った印象は決して肯定的なものであったはずがなく、否定的であって当然だったはずである。しかし、彼女もまた母と同じ間違いを犯してしまった。そうして世間の非難を浴

びて後、しみじみと思い出すのは母のこと、血筋の恐ろしさについてではないか。そんな思いが彼女を冷静にさせ、自分の体験をも客観視させた。もともと持っていた異性関係への否定的な感情は消えることなく底に流れている。何故なら恋愛の裏側の、いわば人と人との憎み合いの部分はずっと昔に既に体験していたのだから。自分の恋愛においても隠された部分を見通す事ができたのである。

母の異性問題による「原体験」が恋愛に対する批判的な素地を作り、執筆態度に影響したのではないか、ということの一つの可能性として提示したい。

## (二) 仏教思想

和泉の和歌の中には仏道を求めるものが多い。初の勅撰集入集歌、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

(拾遺二〇・哀傷)

が、娘時代の仏教への傾叙を示すものとされている。もしも和泉の内面において、仏教思想が深く根ざしたものであったとしたらそこに恋愛への批判的態度の要因を探ることはできないだろうか。

岩瀬法雲氏は、家集の中から三つの連作歌を取り上げて和泉の

仏教思想を考察しておられる。<sup>注7</sup> そのうち二つについて考えてみたい。

一つは野村氏も取り上げた「いにしへや…」から続く連作十二首<sup>注8</sup>で、第一首は懺悔、第二首からは懺悔の内容、即ち「うき」の告白であり、十二首の最後

春雨の降るにつけてぞ世の中のうきもあはれと思ひしらるる

(四五三)

は、今まで述べてきた様々の「うき」を「あはれ」に転じようとした、としている。連作は一首毎に「出家を思う」と言う緒が通り、第一首の懺悔に呼応するものであって、今回のことで起ったこの「うき」も思えば仏道に入る機縁だったのだ、仏のする方便だったのだ、というのが「あはれ」の内容であると更に述べる。

野村氏とは歌の成立時期にずれがあり、為尊親王との一件の後の作としているが、同じように恋愛の後の懺悔という点で、「和泉式部日記」の批判的な執筆態度と通じるものがあると思う。つまり仏教思想ゆえの懺悔の気持ちたちが恋愛体験を突き放し、厳しい目で見つめさせたのである。

次の連作歌は詞書に「我不<sup>シマ</sup>愛<sup>ニ</sup>身体<sup>ヲ</sup>」と言ふ心を上にすゑて」とある十二首で、経文は法華経勸持品の古来二十行の偈と言われ

る中にある。岩瀬氏の考察をまとめると、「といふ心を上にすゑて」とあるように、単に偈の訓読十二首を十二首の頭に配したのではなく、どの一音にも偈の意味を籠めているという。偈は下の句「但惜<sup>マッ</sup>無上道<sup>ヲ</sup>」を入れて意味が完結する。即ち、身体を捨てて無上道と取り換えよう、無上道を護ろう、ということである。十二首のうち、「みる夢も…」「しばしふる…」「いかばかり…」に、それが強く表われている。偈は元來諸の菩薩たちが釈尊の滅後、法華經を持ち、広めるに当たつての覚悟を釈尊に誓つた語なのである。

濁劫惡世の中には、（中略）われを罵詈訾辱せんも、我等は、仏を敬信したてまつるをもつて、当に忍辱の鎧を著るべし。この經を説かんがための故に、この諸の難事を忍ばん。

我身命を愛まず、但、無上道を惜むなり。（法華經（中）勸

持品第十三 二三八頁 傍線は筆者）

傍線の所が示すように、この經を広めるにはただならぬ迫害を予想しなければならず、愛欲が道に入る方便となるには、仏に身体を捧げ切る、絶対の自己否定が条件になければならない、即ち「我不<sup>レ</sup>愛<sup>ニ</sup>身体<sup>ニ</sup>」である。以上のように法華經との、特に無上道との関連を説いておられる。

ここで注目したいのは、「絶対の自己否定」ということである。

愛欲の自分を否定するという代償を払う者にのみ無上道が得られるという。この連作歌は何人かの男出入りにより非難をうけ、苦悩を重ねた後年の和泉の作らしい。短絡的かもしれないが、この連作歌の作られた「自己否定」の心境と「和泉式部日記」の執筆態度は重なる、とは考えられないだろうか。苦悩の末、「我不<sup>レ</sup>愛<sup>ニ</sup>身体<sup>ニ</sup>」の境地にたどり着いた和泉が師宮との愛欲に溺れた自分を赤裸々に描き、それを批判しようとする事で、無上道へ近づこうとしたのではないか。日記中にも、女が仏道修行する様子も描かれていて、宮廷入りを決意してもなお「この宮仕え本意にもあらず、巖の中こそ住まほしけれ」と、出家隱遁を志向しているような記述があり、作者・和泉式部への線を示しているように暗示的である。

懺悔にしても自己否定にしても、幾多の非難を浴び、自分自身も次々と愛する者の死を見送るという不幸を重ねていった、後年の和泉式部の心境であろう。しかし、その素になる仏教思想は「くらきより…」の歌が詠まれた少女時代から、どの程度のものであったかは不明としても、内面に確実に存在していたと見るべきであろう。

以上、執筆態度の原因を、和泉式部の内面的な問題から探ってみた。推定の域を出ないが、一応考えられる可能性として提示し

た次第である。

## 結び

作品としての構想の基本にあったのは、恋愛のなるべく真実に近い姿を書く、という和泉の意志であった。それは、批判的に考えることができる位の冷静さを持っていたからこそ生まれた。それらが全て執筆の姿勢となり、日記として大変に特殊な、あのいくつかの叙述を生んだのだった。知るよしもない宮や北の方側の出来事、心情を、あえて想像や憶測によって描いたという行為の背景には、そのような、作者・和泉式部の確固とした意図があった、と考えたい。「和泉式部日記」の物語性、物語的描写は必然性があったて生まれたものである。

最後に、恋愛の当事者があえて裏側の見えない部分を記したことで、真実性がより強化されたのであって、物語的な形をとったことをすぐに虚構と結びつけてしまうのは間違っているのではないか、という私見を述べ、締めくくりたい。

## 注

注1 木村正中氏「日記文学の本質と創作心理」『講座日本文学の争点』(昭和43年12月)等

注2 鈴木一雄氏『全講和泉式部日記』(至文堂 昭和40年)

注3 抜き出すにあたっての基準は場面が転換していること作中の女

も、作者の和泉も知るよしもない出来事が描かれていること、そこでの登場人物に「動き」があること、である。

注4 ページ及び引用は新潮古典集成『和泉式部日記 和泉式部集』による。(新潮社 昭和56年2月)

注5 尾崎知光氏『和泉式部日記考注』(東宝書房 昭和29年)

注6 新潮古典集成・解説より

注7 「和泉式部の仏教思想」『中古文学』12 (昭和48年11月)

注8 岩波文庫『和泉式部集 和泉式部統集』清水文雄校注の四四二～四五三

(昭五九 日文卒)